おおさか KEY わーど 第63回

八百八橋に猫たちは生きている

朝から晩までニャーニャーニャー

ギリシアのミコノス島など、世界の美しい風景に生きる猫の写真集や映像が人気である。大阪にも猫がたくさんいる。猫について書いてみよう。題して“おおさかニャンコ尽くし”。

まず、芸人ゆかりの「てんのじ村」界隈にある松乃木大明神（西成区）の「猫塚」である。三味線にされた猫の供養のため、明治34（1901）年に建立された。三味線の胴の形をした碑で、同じ境内には近松門左衛門の辞世の句を刻んだ碑もあって、猫塚芸能祭も開催されてきた。この辺り、猫の小鉄とアントニオJr.が大活躍の漫画、はるき悦巳『じゃりン子チエ』の舞台であり、通天閣にUFOが飛来するドタバタの名作、筒井康隆の『ヒノマル酒場』には、「猫が死にましてのう」と呟く古書店の隠居が登場する。

松乃木大明神。中央が「猫塚」、左が近松の記念碑。

芸能なら、文楽に赤川次郎『三毛猫ホームズの文楽夜噺』があるし、上方落語には浄瑠璃『義経千本桜』の四段目「道行初音旅（みちゆきはつねのたび）」をパロディーにした「猫の忠信」がある。三味線の胴に皮を張られた親を慕う子どもの猫が人間に化け、「わたくしの親は、あれに掛かりしあの三味線」と嘆く咄だ。古典では西鶴の『日本永代蔵（にっぽんえいだいくら）』に、前世は西行法師ゆかりの金製の猫の像だったという、しぶちん親爺の話がある。

絵では、江戸時代の大坂の画人橘守国（たちばなもりくに）（1679～1748）が『運筆麁画（うんぴつそが）』に墨画で飼い猫を描き、浮世絵師歌川芳梅（うたがわよしうめ）（1819～1879）は、「猫が熱いお茶を吹いたような滑稽な表情」を意味する諺（ことわざ）の「猫が茶を吹く」を擬人化して笑わせる。洋画家小出楢重（こいでならしげ）（1887～1931）の画学生時代の絵日記では、島之内の長堀橋筋（堺筋）に面した小出の実家のなかが猫でいっぱいだ。

今は埋め立てられたが、地名に猫を探せば“猫間川”がある。高麗川（こまがわ）が訛って「ねこま川」になったといわれ、大阪環状線の東側、現在の生野区から東成区を流れ、城東区で平野川に合流して大坂城の堀の役割も担っていた。天保年間の川浚（ざら）えを記念した「猫間川川浚碑」が玉造稲荷神社に建てられた。

小出楢重のスケッチ。寝そべって本を読むと猫だらけ。

川つながりでは、そのむかし「猫橋」という橋の下から掘り出された六体のお地蔵さんを祀ったのが「猫橋地蔵」（東大阪市）である。ならば、阿吽の獅子の石像で「ライオン橋」の異名をとる中之島の難波橋も、“大大阪時代”らしい大きなネコ科の「猫橋」となるか。

大阪しゃれ言葉の「死んだネコの仔」は、「ニャンとも言わず」で「何も言わない」の意味。対して、もとは長堀川だった地下街クリスタ長堀の「まねきゃっと（開運招き猫）」は、彫刻なのにセンサーで「みゃあ～」と鳴く。

🐾 🐾 🐾

昭和40年代、小学生であった私の記憶に焼きついた光景がある。空堀の駄菓子屋へお小遣いを握っていく途中、東横堀川の橋の上に人が集まって騒いでいる。「なんやろ？」とのぞくと、川に落ちた猫をバケツで吊り下げ、すくいあげようと四苦八苦していた……。

実はこの春、わが家の猫のチャビタが死んだ。飼い主の引っ越しで置き去りにされたのを、阪神淡路の震災直前に家の前で拾った雌猫で、享年20歳と5ヶ月。人間なら120歳は超えた長寿である。年を経て神通力を授かり、ご主人様をたすけてくれろと願っていたが、猫又に化ける前に天使になった。悲しい哉（かな）。しかし、この子が天寿を全うしたことで、懸命に立ち泳ぎしていた、あのときの猫の供養になった気もする。

チャビは先祖代々、大阪に住み、夏の陣では、ご先祖さまが大坂城の「犬走り」を忍者みたいに駆け回っていたのじゃ……と勝手に思い込んでいる私だが、天国からスルスルと抜け出て、いつもの寝床に帰っておいで、チャビちゃん。

筆者プロフィール
橋爪 節也 はしづめ せつや
大阪大学総合学術博物館前館長／大学院文学研究科教授。1958年、大阪市生まれ。東京芸術大学大学院修了。大阪市立近代美術館建設準備室学芸員を18年間つとめ現職。専門は日本美術史。展覧会では「没後200年記念木村蒹葭堂―なにわ　知の巨人―」「北野恒富展」「没後80年記念佐伯祐三展」などに携わる。編著に『大大阪イメージ―増殖するマンモス／モダン都市の幻像―』（創元社）など。